# りこうな末っ子　　スイス

むかし、あったとさ。

ある村に、金持ちの地主がいました。たくさんのお百姓たちが、地主の畑を借りていました。そのなかでいちばんよく働くお百姓は、地主に畑の借り賃をはらうことができないでいました。なにしろ子どもが七人もいて、食べさせるのがやっとだったのです。お百姓は、毎年、地主にこう言い訳をしました。

「ちょっと待ってください。もう二、三年して、うちのりこうな末っ子が大きくなったら、お金も利子もはらいますから」

地主は、そんなにいうなら、そのりこうな末っ子を見てみたいと思いました。

ある日のこと、地主は、お百姓の家を訪ねて行きました。すると、ちょうど末っ子がひとりで留守番をしていました。地主は、

「これはうまいぐあいだ」と思いました。

末っ子は、台所のかまどのそばに腰かけていました。地主は入って行って、たずねました。

「ここでひとりで何をしてるんだね」

末っ子は、

「みんながとんだりはねたりしているのを、ながめてるんだ」と答えました。地主は、心の中で、

「ふーん。この坊主は、ひとりで台所に座って、みんながとんだりはねたりしているのを見ているんだと。ばかじゃあるまいか」と思いました。そして、

「お父さんは、どこにいるかね」とたずねました。

「ああ、お父さんは、ひとつの仕事で損と得をするために出かけたよ」と、末っ子は答えました。

「では、お母さんは、どこにいるかね」

「お母さんは、もう食べちゃったパンを焼きに行ったよ」

地主は、あきれながらも、もうひとつたずねました。

「じゃあ、おまえたちといっしょに住んでいるおまえのおばさんは、どこにいるかね」

「ああ、あのまぬけなおばさんですか。おばさんは、二階の自分の部屋で、去年の喜び

のことを泣いているよ」

地主は、末っ子に、

「おまえの答えは、まるでなぞだ。そのなぞを説明してごらん」といいました。

「いいよ。説明したら、お父さんを少しは助けることができるかも知れないからね」

末っ子はそういって、かまどにかけてあるなべのふたを取りました。なべの中では、豆が煮えていました。

「ごらんよ、豆がお湯の中でとんだりはねたりしているでしょ」と、末っ子はいいました。

「なるほど。たしかにおまえのいうとおりだ。では、どうしておまえのお父さんは、いちどきに損と得をする仕事ができるのか、話してくれ」

「お父さんは、今日、牧草地に水をやりに行ったんだけど、いつもおとなりから少しばかり水を盗むんだ。だから、おとなりには損をあたえるけど、ぼくのうちには得になる」

「ほう、いい説明だ。お父さんのしていることはちょっとまずいけれど、おまえの答えはみごとなもんだ。では、もうひとつ話してくれ。おまえのお母さんがもう食べてしまったパンを焼くことができるのは、どうしてなんだ」

「ああ、それはかんたんだよ。先週うちにはパンがなくっておとなりからもらったんだ。今日お母さんは、パンを焼いておとなりに返すのさ」

「みごと。この答えも気に入ったぞ。だが、もうひとつ。おまえのおばさんが去年の喜びのことを泣いているというのはどうしてなんだ」

「おばさんは、去年結婚式をあげて、喜びがいっぱいだったの。そして、今は、二階で子どもを産むのに痛くて泣いてるんだよ」

地主は、いいました。

「よし、わしは大いに満足したぞ。おまえは、人になぞをかけることができるし、それを解くこともできる。お父さんが帰ってきたらこういいなさい。『今日地主がうちに来た。そして、ぼくのみごとななぞとりこうな答えで、今までの畑の借り賃と利子をぜんぶ払ってしまった』とな。わしは、おまえの知恵がますますのびるように願っているよ」

地主は、そういうと、幸せそうに家に帰っていきましたとさ。

村上郁再話

資料『世界の民話1ドイツ・スイス』小澤俊夫編訳／ぎょうせい